琉球大学学術リポジトリ

景域環境ユニットを用いた地域環境表現と都市開発事業に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 池田孝之 公開日: 2009-08-20 キーワード (Ja): 地域環境表現, 集落環境保全, 環境保全型都市開発, 景域環境体ユニット, 都市・地域計画, 景域, 市民参加, 生態学的環境保護, 都市開発事業, ビオトープ, 景域環境ユニット, 都市開発 キーワード (En): Landscape, Citizen's Participation, Urbanand Regional Planning, Urban Development, Ecological Conservation 作成者: 池田, 孝之, 三村, 浩史, 水原, 渉, 阿部, 成治, 中山, 徹, 清水, 肇, 神吉, 紀世子, 海道, 清信, Ikeda, Takayuki, Mimura, Hiroshi, Mizuhara, Wataru, Abe, Joji, Nakayama, Toru, Shimizu, Hajime, Kanki, Kiyoko, Kaidou, Kiyonobu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/11971

第７章　エコタウン・ランゲージ

－インターネットによるエコロジカルなまちづくりのイメージの発信－

（高橋　恒）

７－１　はじまり：一人から始まる「人間のまち」づくり

「まち」を作ろうと思ったとき、一人でもやれるとは誰も思わないと思う。しかし、それは多分に思い込みに過ぎないのである。もう少し詳しくいうと、きれいに描かれた計画図があって始めて「まち」は作られると思い込んでいるからなのである。こうした思い込みは近代が作り出した「計画」という概念に由来しているものである。

考えてみれば、あの懐かしい歴史的な町々はそのような図面によって作られはしなかったのではないだろうか。それはひとりひとりの住民の個々の営為として、かなりの長い時間をかけて、部分の積み重ねとして作られたのではなかっただろうか。

確かにこれらには、誰かが計画したかのようなまとまりが存在している。

しかし、それはある原理的な法則にしたがって作られたからではないのだろうか。ある共有されうる原理的なものがある限り、ひとりひとりが作り出す住居や「まち」はある種のまとまりをもって現れるとは考えられないだろうか。

これに対して近代的計画が生みだしたものはどうであったか、それは個々の企てに対する規制による画一性か、そうでなければ個性の表出を第一とした騒々しい混乱であったといえよう。

この間のことに、C．アレグザンダーは一つの答えを出した。

即ち、自然に生成してくるものは原理的な法則にしたがって、それぞれそれなりの形に出来上がってくるという、自己生成という観念である。それは町や建築が個性に属する作品ではなく「無名の質」をもつものとして、価値を排除しようとしている。しかし同時にそれらが「自然の一部になる」ことを求めており、彼の求める「全一的なもの」は近代とは異なる「ある価値」をもっているといえる。彼はこうした原理的なものを呼び覚ますために、住民が自分たちの手で「まち」づくりをやれるようなツールとして、パタンランゲージなるものを提唱した。これはコトバが詩を綴るように、選ばれた語句（パタン）によって「まち」や建築の有り様を綴ろうというもので、語句を共有すれば誰でも同質の遺伝情報をもったパーツで「まち」を作ることが可能になるというものである。[注1]

パタンランゲージとはこの原理的な法則を具体化したものといえる。つまり、この考え方によれば、まとまりのある「まち」づくりも一人から始めることが可能になってくるのである。　現在、「人間のまち」というとき、是非とも保持しなければならない論理として後述の三つの側面があると考えられるが、それはあたかも、三つの面をもつ”阿修羅”の顔のように、民衆の人間的な暮らしの成立を願う悲願を示す三面であり、”阿修羅’’の力に匹敵するような「まち」づくりの原理ともいえるものである。（図－1）

これを基盤としてパタンランゲージを作れば、「人間のまち」を皆でつくって行くことが可態となってくる。

ここにこのエコタウン・ランゲージが作られる源がある。

[注1] C．アレグザンダー　平田鞄那訳　「時を超えた建設の道」　鹿島出飯会

環境論の顔：エコロジズム
「人工でうまくゆく」という論理：　開発の彼方に解放があると
「自然のなかでやる」論理の登場：　経済活動の減速と生態系内への着陸
集中の地域への分散
自然の原理を受け止めるパッシヴな技術

疎外論の顔：リージョナリズム
近代化、都市化：　普遍的な個人化の極である「他者」との関係を認識できない疎外態
「共同体的な」文化の選び取り：　近代的個人が「他者」認識を得て全人格的な存在として個別化、相対化する
世界的レベルでは：　近代の普遍的支配に対する民族主義からの異議
特殊性、地域性の承認
民族的伝統や地域的産業を軸とした内発的発展の実現

「形成論」の顔：　パタン・ランゲージ
近代的計画：　マスタープランをもつ
形式的画一性または個性の騒々しい混乱
住民と計画者の矛盾の顕在
自然につくられるということ：
アノニマス＆ヴァナキュラー
住民の文化の尊重
ひとりひとりの営為・長い時間・部分の積み重ね
原理的な法則による計画したかのようなまとまり
自然の一部として運動する「自己生成の論理」

図７－１　「まち」づくりの三原理

７－２　「人間のまち」守護の”阿修羅”の三つの顔

a　「環境論」の顔：エコロジズム

自然環境の破壊が進んでいることはもはや誰でもが知っていることである。CO2にしてもフロンにしても、日常の生活の快適さを支えているものが環境を壊していることも明らかになっている。近代化への離陸が遅れた諸国が懸命に近代化の競争を行っていることもまた皆知られていることである。

しかし、このままで地球全体が消費水準を上げて行けば今の自然環境は人間の生存にとって不適となることは、あまり気になっているようには見えないし、そこまで楽天的でなくても科学技術の発展がなんとかしてくれるだろうと思っている人が普通であるように思われる。

「人工でうまくゆく」という論理がまだ罷り通っているのである。

近代化後発国が懸命に近代化競争をするのも、開発の彼方に解放があると信じて疑わないからである。

しかしながら、エントロピーの理論による「成長の限界」が思いの外に早くやってきて、特に地球の熱循環と生物循環の速度を越える大量の廃熱と廃棄物質の排出、および循環に乗らない人工物質の排出は、地球規模での環境汚染を急速に進行させている。

即ち、このことは科学技術の発最にかかわらず、あらゆる過経でエントロピーの増大が不可逆であることを示しており、技術による解決には限界があるといえる。

ここに「自然のなかでやる」論理の登場をうながす必然性がある。

人間の活動を地球の熱循環と生物循環の速度内に納めることが必要なのである。基本的には、経済活動の全体的な減速と生態系内への着陸が問題となる。更に、地球の汚染処理能力は面積的に均一であると考えられるから、集中は問題の悪化に繋がることになる。生態系が地域的であることからも、集中の地域への分散が必須となってくる。

これらのことは、効率を求めて都市へ集中し、経済の成長を求め続ける現代の主流とは異質の様相をもっ

ており、あきらかに価値観の転換の必要を意味している。

こうした文化を支える技術は、ソフト・テクノロジーといわれる自然の原理を受け止めて目的を遂げるパッシヴな技術を主体としなければならず、これはエコロジカルな文化を創り出す価値志向の技術となるであろう。[注2]

「エコロジズム」が「環境論」の顔となる。

b　「疎外論」の顔：リージョナリズム

産業革命以来、近代化・都市化の進行が、「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」という問題を提出してきたことは有名である。

しかし、個人化の進行は共同体的規制からの離脱ではあっても真の解放ではなく、全人格を認めていた人間結合を解体して、人間を単なる対象と化し、新たな疎外を生み出した。これは、基本的にはコミュニケーション・チャンネルの変化を原因として説明することができる。即ち、足で歩き、顔を合わせて、コトバで話す直接的コミュニケーションが、印刷物を始めとしてマスメディアに至るなんらかの媒体を介在させる間接的コミュニケーションへと変化したことによって、複雑で多面的な意味の伝達が不可能となり、これらの上に成立していた地域的人間関係を解体してしまったということである。

こうして、人間という全人格的存在は単なる「一面的な対象物となり果ててしまった。

しかも地域に存在した特殊性は無視され、近代科学の生み出した普遍性の支配によつて都市文化の一様性が主流に踊り出ることとなった。

しかし、現在でも直接的コミュニケーションに基づく文化＝「共同体的なもの」は本来的であり生態学的基盤をもっていたために完全には解体されず、間接的コミュニケーションに基づく文化＝「都市的なもの」と対立的併存の状憶になっている。[注3]

したがって今、現状の「他者」との関係を認識できない個人化の極である疎外態から脱出し、全人格的な存在としての主体性を回復しようとするなら、「共同体的なもの」に属する文化の選び取りを行わなければならないことになる。

この問題は、早くからコミュニティー論としていわれてきたことであるが、華やかな都市論の影に隠れてしまってきた。

けれども、今でも人間的な「まち」に必要なのは、自律的地域単位の建設ということであり、生活施設の地域的な性格の獲得ということであると考えられる。これは前近代への逆行ではなく、一旦確立した近代的個人が「他者」認識を得て相対化するということであり、解放への一歩前進ということである。

この問題は、世界のレベルでも起こっており、近代の普遍的支配に対する民族主義の反乱という形で、近代の国民国家の乗り越えとなって現れている。国際政治的には南北問題として反映されており、多様性の承認を始めとして先進国の国家間支配の放棄がカギとなっている。問題は先進国の資源支配の欲望と後発国の資源を挺とした開発願望である。

ODAの獲得による近代工業の移植といった開発では、普遍的な資本による支配・被支配関係を揚葉できず、後発国の真の解放はない。それぞれの国の特殊性、地域性に則り、民族的伝統や地域的産業を軸とした

注2 高橋　恒　「地域へ　着陸の計画論」　近代文藝社

注3 同前

内発的発展の実現にしか道は開けないであろう。[注4] [注5]

「リージョナリズム」が「疎外論」の顔となる。

c「形成論」の顔：パタン・ランゲージ

近代的計画はマスター・プランをもつのが普通である。

細部の計画は、上位計画からブレーク・ダウン方式で下ろされてくる。したがって形式的には整っていて、綺麗に見える。

しかし、致命的な欠陥があって、末端の住民と意思の疎通がないとボタンの掛け違いが起こって、一つ間違うと激しく対立した「成田」の二の舞を舞うことになってしまう。

このことは、体制と民衆の間には常に矛盾が存在するからであって、その解決の仕方が拙劣なことが多いからである。つまり、革の根からの主張を聞く耳をもたないからであり、こうした矛盾は解決不能と思い込んでいるからである。

実際には、住民のもっている生活や制度や願望などを許容して、将来が現在の関数であるようなシステムを作ることは、システム工学的に可能とされている。[注6]

矛盾が対立的に拡大するのは、体制側の計画意思の傾向によるのである。

したがって、住民の手で自然発生的に作られた歴史的な町には、計画することによるこうした矛盾は存在しない。しかもなお、懐かしく美しいのである。

また、一時に大規模に造られるということはギクシャクとした文化的ギャップを感じさせる。

そこで、自然に作られるということはどういうことかを考えてみると、次のような特徴がある。一つはそれはアノニマス（無名性）であり、ヴァナキュラー（地方性）なことである。また、全体が一遍に作り上げられることはなく、ゆっくりとした時間をかけて、部分的に作られていって全体で形をなしてゆく。そしてそれぞれの場所にぴったりと嵌まっていて均一でなく個性的である。そしてもう一つ、なによりも住民自身の手で作り上げられている。

これらが自然さを作りだしているのである。すべての「まち」づくりに際してこうゆかないものであろうか。

これに対して少数者の造ったマスタープランによる大規模な計画的まちづくりは、とこか白々しく、よそよそしく作り物の感を免れない。

はじまりで述べたように、C．アレグザンダーはこうした「まち」の自然さに心惹かれて、そのプロセスを実現するためのツールとしてパタン・ランゲージを作りだしたのであった。この時、彼のまなざしの内には、「まち」づくりのプロセスばかりではなく、生物の発生や宇宙の創生などの万物の生成に見られる「自己生成の論理」が捉えられていたのである。自己創出システムが第一に志向するのは何らかの生産物の生産ではなく、同一のプロセス横造を自己更新していくことであり、システムの将来の進化は各分岐点において自由な決定がなされる決定樹木に以たものである。[注7]

C・アレグザンダーの「パタン・ランゲージ」が「形成論」の顔となる。

[注4] 鶴見和子・川田　侃編　「内発的発展論」　東京大学出版会

[注5] アレキサンダー・キング　ベルトラン・シュナイダー　田草川弘訳　「第一次地球革命　ローマクラブレポート」　朝日新聞社

[注6] R・ボーグスロー　大友立也訳　「システムの生態」　ダイヤモンド社

[注7] エリッヒ・ヤンツ　芹沢高志・内田美恵訳　「自己組織化する宇宙」　工作社

以上、三つの顔を見てみるといずれも現代の主流に対する対抗的(オールタナティヴ)な形相をもっており、”阿修羅”の護る「まち」づくりの原理は「オールタナティヴなもの」であることが分かる。

この”阿修羅”の統一的な形相が「エコタウン・ランゲージ」と名付けられるものとなる。

7－3　「まち」の構造の認識

「まち」をつくりだす原理と交差させるべき構成要素の関係を図式化すると次のようになる。(図－2)

日本列島の基盤としては、生態系よりも上部の構造だけを捉えているだけでは不充分であって、地殻の状態までを考えて置かなければならない。地域を基礎づけるものは河川の流域や山系だけでなく、火山活動や活断層までを含んだものとなる。

三つの原理とこれらの要素との交点をチェックすることにより「エコタウン・ランゲージ」のパタンを拾うことができる。

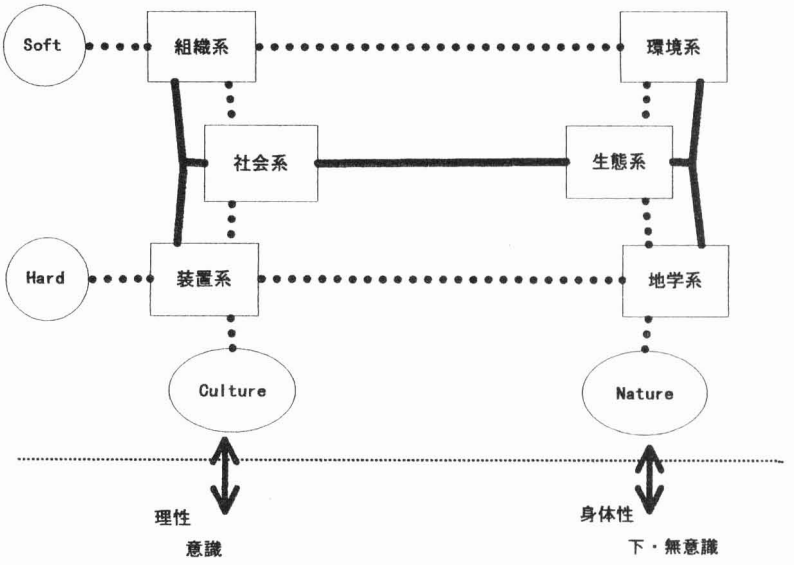

図7－2　「まち」の構造

7－4　「エコタウン・ランゲージ」の働き、構成、使い方

このように「エコタウン・ランゲージ」は、体制的なプログラム転換のための具体的な目標を与えるものである。しかも、価値観を見失わずに部分から全体を作り上げてゆくためのツールとしての働きをもっている。そして、どこの地域に使っても、地域の特殊性を損なわないように、マスタープランとは違って全体的な固定した形式をもってはいない。そして同時に、具体的で自由なイメージを示すものである。

即ち、それは明らかな意味を持った「形式の部分」からなっており、これらの部分をまとめて全体を作ることができ、同時にその全件が部分を位置づけうるようなシステムとなっている。これは、一種の言語ともいってよいものであり、ランゲージの呼称もそこに由来する。

したがって、計画の全体的な質を保証する遺伝情報ともいえ、実体化された部分のモザイクが増殖することによって、「自然のなかでやる」系に属する一つの文化の「整序されざる全体性」というべきものを生み出すことができる。

人間的な「まち」は、このような認識基盤の上に立って始めて具体的な形を与えられ、ひとつの構想（コンセプト）となるのである。

このランゲージの横成は次の４部からなり、大きい見地から、順次細かい部分・具体へと推移している。

Ⅰ　道　筋

Ⅱ　振舞い

Ⅲ　組立て

Ⅳ　仕掛け

これらは部分、水準を問わずどこからでも着手可能であり、地域的な状況に合わせて適宜取り出して採用することができるし、地域の特殊性に合わせて追加・修正することもできる。

内容の概要を示すと次のようになる。

目　　次

Ⅰ　道　筋

［エネルギー］1 消費の減少、廃棄の減少　2 電力、動力の消費水準を落とす　3 エネルギーのソフト化　4 エネルギーの地域プラント　5 太陽エネルギー収集近隣ヤード　6 パッシヴソーラー地区の設定　［廃棄物］7 物質の代謝量を減らす　8 廃棄物が自然のなかで分解されること　9 サイクル・システムの確立　10 コンテナー化、包装の減量　11 不要物交換システム　12 モノは最後まで利用する　13 ゴミ収集近隣ヤード　14 リサイクル地域センター　15 廃棄物処分場　［ソフト＆パッシヴなテクノロジー］16 ソフトテクノロジーの展開　17 環境の建築的解決の重視　18 手動装置への回帰　19 電池使用機械の抑制　20 少ないコンピューターによるソフト・テクノロジー支持のための解析応用　［循環の回復］21 循環システムの河復　22 地表の自然面への復元　23 囲薔の生け垣化　24 壁面・屋根面の緑化　25 舗装は最少に　［自然維持］26 自然との接触の仕方を変えること　27 観光開発の規制　28 スポーツの再検討　29 自然の回復　30 現存する自然の調査と保全　31 都市内農地　32 市民農園　33 農業の自然化　34 木を切らないこと　35 庭　36 近隣の緑　37 小さな緑　38 屋敷林、防風林　39 社寺林　40 雑木林　41 原っぱ　［土・水・空気・方位］42 常に大地を意識する　43 地形を見る　44 丘を大切にする　45 地殻変動・活断層を意識する　46 地震・火山　47 津波　48 集中豪雨・河川の氾濫・土石流　49 上水　50 井戸　51 雨水利用　52 貯水槽　53 保水　54 水系の保全　55 水質汚濁の防止　56 下水規模の縮小　57 汚水は浄化槽から川・地中へ　58 中水利用　59 水面を活かす　60 岸辺　61 水路　62 地下水による融雪　63 防雪林　64 雁木　65 恒常風　66 季節風　67 台風　68 防風林　69 気温・湿度　70 方位を読む　［作法］71 材料の選択　72 地場の材料を使う　73 組み立て方に対する配慮　74 修理可能な構造　75 開口部の仕掛け　76 建築物の寿命の延長　77 つくる姿勢の再考　78 建築の評価　79 調和的デザイン　80 空間の地域的配慮　81 未完成の完成　82 歴史の参照　83 地誌を読む　84 長いタイムスパン　85 コンピューターに任せない

Ⅱ　振舞い

［環境管理］86 環境生協・環境管理組合　87 アセスメント　88 環境汚染監視近隣ポイント　89 環境管理地域センター　〔空間管理］90 都市計画・地域計画の自治体への権限委譲　91 自治体による地域計画への住民参加　92 地区計画住民会議　93 空間管理地域センター　94 ダウンゾーニング　95 形式的完成を目指さないこと　96 アドボケイト・プランナーの獲得　［防災システム］97 大震災住民安全計画　98 防災地域センター　99 防災近隣システム　100 備蓄ポイント　101 防災倫理　［地域活動・自治］102 地域施設運営委員会・住民協議会　103 地域生活時間の増大　104 地域活動への参加の拡大　105 各種の

地域委員会　106 各種の草の根運動体　107 各種のクラブ、サークル　108 地域誌紙の発行　109 自律的単位の創出　［地域への誘導・助成］110 助成機関　111 条例、法律による助成　112 税によるコントロール　113 情報公開　114 地域センターの設置　［住　民］115 都市原住民の生活権尊重　116 生活必需品を遠くに依存しない　117「まち」の地面を支配すること　118 地域の認識　119 自助的な住み方　120 たたずまいの創出　121 共同性による公共性　122 共同性による管理　123 協同組合的発想　124 ハレとケをつくる　125 歴史との連続　126 地域の顔　127 心のなかの美しい風景　128 格差観　129 人間の管理をコンピューター化しない　［行　事］130 季節の行事　131 通過儀礼　132 地域的な記憶の行事　133 レジャー的行事　134 聖なる祭り

Ⅲ　組立て

［モデュール］135 社会的尺度　136 近隣・まちのモデュール　137 感覚的尺度　［単位・圏域］138 地域的な生活の圏域　139 コミュニケーション・レンジ　140 近隣交流圏・隣近所の範囲　141「向こう三軒両隣」　142 近隣の単位　143「まち」の範囲　144 徒歩10分圏　145 地域の単位　146 地学的学位　［まとまりの構成］147 まとまりのゲシュタルト　148 領域化されやすい空間の型　149 アプローチ経路　150 棟のまとまりの3つの同一性　151 まとまりの大きさ　152 まとまりの境界　153 流れ、淀み、ポイント　［ポイント］154 地域の中心　155 象徴的ランドマーク　156 駅　157 バス停　158 歩行路と道路の援合点　159 橋と橋詰　160 まちのなかの店舗　161 近隣の小広場

Ⅳ　仕掛け

［住　居］162 住居は低層とする　163 まちの地面に住む　164 住居の個別化・多様化　165 住居の固くないこと　166 プライバシーの抑制　167 小規模の住棟　168 棟のまとまり　169 住居群の分節化　170 混成型　171 アクセスの自由度　［近　隣］172 まとまりの原点　173 近隣のモザイク　174 装置の設置　［共有空間］　175 協同体的領域　176 共有空間のネットワーク　177 露路・道路　178 広場・公園　［地　域］179 市街地の拡大の防止　180 際限のない連続の遮断　181 郊外の解消　182 仕事場の分散　183 賑わいの分散　184 混成系　185 自動車の道路と住宅の切り離し　186 住居域内の通過道路の禁止　187 散策街路　188 小型の柔らかい駐車場　189 バス停　［地域施設］190 小さくても近くに　191 自分たちのもの　192 中心方向への偏心　193 コミュニテイーセンター　194 文化センター　195 空間的複合のすすめ　196 近隣公園　［福祉・保険］197 福祉生協、ワーカーズ・コレクティヴ　198 福祉地域センター　199 保健・医療地域センター　200 巡回看護、ヘルパー　201 保育所　［子　供］202 子供の遊び場　203 空き地　204 回遊ネットワーク　205 子供の家　［青少年］206 地域とつなぐ儀礼　207 学童の家　208 １０代のスペース　209 地域クラブの組織　［老　人］210 地域における役割　211 老人の家　212 クラブ・サークルの組織　213 地域で老いる　214 災害弱者としての老人　［障害者］215 ノーマライゼーション　216 仕事場の保証　217 障害者作業所　218 日常的訓練所　219 災害弱者としての障害者　［店　舗］220 地元商店街　221 マーケット　222 住居地のなかの店　223 出店　224 生協売店つき配送所　［盛り場］225 表町と裏町　226 良質の雰囲気　［仕事場］227 職住近接　228 工場の小挽模な集積　229 町工場のクラスター　230 大規模な工場　［交　通］231 市街地流入自動車の総量規制　232 道路交通システムの転換　233 自動車の利用の仕方の再検討　234 公共交通システムの確保　235 地域バス　236 一方通行　237 歩行の尊重・歩行路　238 自転車の推奨　239 クロス通勤の解消　240 郊

外からの通勤の解消　［インフラ］241 インフラの地域化　242 深く埋設しないライフライン　243 フレキシブルなジョイント　244 重要さは堅固さ　［墓　地］245 地域の墓地　246 斎場　247 緑地、防火帯、避難所　［聖　地］248 聖なるもの　249 聖なる空間　［地域的学校］250 地域のシンボル　251 地域教育のメッカ　252 地域からの利用　［地域的図書館・資料館］253 地域文化の源泉　254 歴史的伝承の媒介拠点　［博物館・記念館］255 アイデンティティのモニュメント　［音楽・演劇ホール］256 文化的拠点 1　［美術館］257 文化的拠点 2[注8]

以上のランゲージを使う実際の「まち」づくりにあたっては、一つでも多くのコトバが実体化されることが重要で、部分から全体へ、完成図をもたず、時間をかけて、みんなで作り上げてゆくところに大きな意味がある。つまり、歴史的なまちの造られるプロセスと相似だということを意識しているのである。そして更に重要なのは、最初にものべたように、やる気になった人が一人でもやれて、しかもその部分的な実体化の積み上げが、まったく新しい体系を創り出すことができるということである。

7－5　原理転換への道

以上の要件の実現は、実は近代から非近代への転換ともいえるものである。この転換の実現には、わが国の伝統的システムの参照が有効である。現存する深い軒の出や高い床などは伝統的な系のものであり、近代の体制の下でもこうした伝統的な技術が部分的に存在するという事実は、体制の下での部分的変革の可能性を示唆することになる。

即ち、全体系の転換の前にも部分的な転換が可能であると考えられるのであり、展開（変革）への展望を開くキーともいうべきものといえる。

また、体制の転換を目指すことから、必然的に目標と現状との間にギャップを生じさせているが、できることは直ちにやる、そして、できる部分から始めてできそうもない部分を目指し、更にはできそうもない全体をも現実のものにしてしまうという、いくつもの段階を想定しており、目標とする体制の制禦（制度をもかえてゆく）を、かなり長い道のりを時間をかけてデザインすることを見通しているものである。

この現実からの辛抱強いアプローチが、オールタナティヴ・ネットワークの形成に繋がるのであり、「自然のなかでやる」パラダイムへの転換をもたらすものなのである。このことを信じて、諦めないことが肝要なのである。

変革の仕方の一つとして、直接的な体制の変革を目指すものがあるがハードウェアを積み重ねて行く「まち」づくりにはなじまない。もう一つの道としては、オールタナティヴ・ネットワークの組織、或いは体制とのパートナーシップへの参加という道がある。わが国では後者が体制化する危険が常にあるため、前者の強化が不可欠であり、部分的なオールタナティヴ・スポットの構築が現実的な第一歩であると考えられる。（図－3）

このことの実現によって、体制のコントロールも可能になるのであり、制度の変更や、ひいては体制の変革をも射程内に納めることができる。

即ち、現体制のもとでもできるところから部分的に着手して実現してしまうことが全体的な転換を意味することになる。

[注8] BIO Cityビオシティ　1995年夏号に概要を掲載　詳しくはホームページを参照

そのためには、まず「まち」づくり運動の展開が有力な目標となり、参加者が「建設されるまち」のコンセプトを共有することが必要不可欠となる。

「エコタウン・ランゲージ」はこのコンセプトを具体的な、そして自由なイメージとして住民に提供するものなのである。

この役割を果たすメディアとしてインターネットの存在は大きなものがある。ブラウザーを通してエコロジカルな価値をもつイメージを全国的に発信することを可能にしてくれる。これを媒介にして全国のまちづくり運動にオールタナティブ・ネットワークへの参加を呼びかけることもできるだろう。エコタウン・ランゲージはこうした特性に意味を見てネットワーク上にホームページとして発信されている（URLはhttp://leo.nit.ac.jp/～kotaka）。

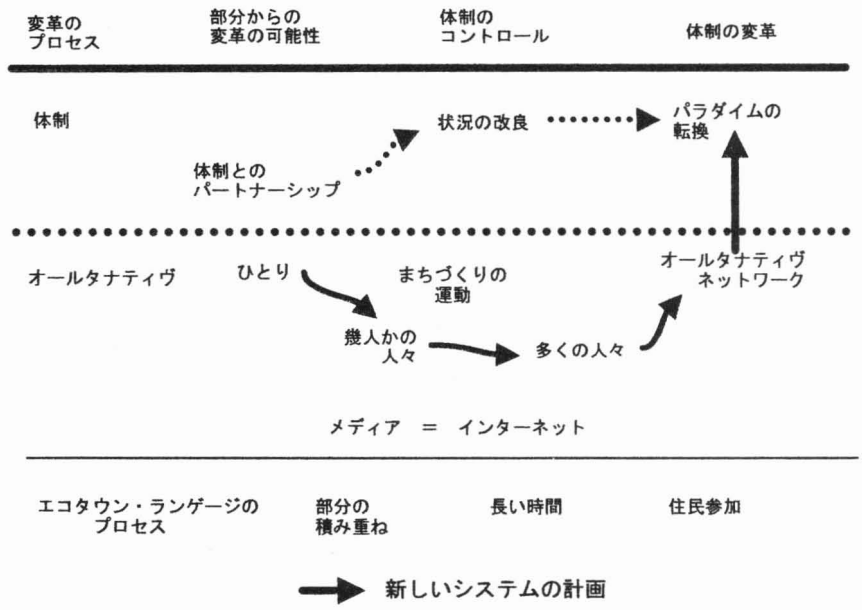

図７－３　変革のプロセス

これによれば地球的なひろがりでの交流をも実現できるのである。

７－６　インターネット・コミュニケーション

このようなプロセスはいくつもの運動の輻輳したものとして創られて行くであろうから、「エコタウン・ランゲージ」自体も多くの同じ価値観を共有する人々の参加によって創り上げられるのが自然の道筋ではないかと考える。

「エコタウン・ランゲージ」をより豊かなものにするために、多くの「まち」に住む人々の参加と協力を要請することが必要である。エコタウン・ランゲージのホームページには次のような要請が載せられている。

［要請］

エコロジカルな「まち」づくりのために住民参加のワークショップに「エコタウン・ランゲージ」を是非お使い下さい。

そして、

1. エコロジカルな「まち」づくり道具として、みんなで「エコタウン・ランゲージ」を強化してくだい。

2. エコタウン・ランゲージ」を新しい価値を求める「まち」づくり運動のデータベースにしましょう。

3. エコタウン・ランゲージ」をオールタナティブな文化としての「まち」づくりネットワークの交流媒体にしましょう。

そこで、最初にお願いがあります。

1. エコタウン・ランゲージ」に追加したい項目がありましたら、お寄せください。

2. エコタウン・ランゲージ」の項目の説明を強化するデータや事例をご存知でしたらその詳細を提供してください。

3. 関連する設備類についてご存知の方は、その提案者、設備名、機能、性能、等お知らせください。

4. 運動団体や個人の相互交流のために、団体名、代表者または個人名、所在、TEL、FAX、Email等、主な活動、目的等、また、メッセージをお送りください。

5. お尋ねになりたいことがありましたら何でもお寄せください。

これはエコタウン・ランゲージの創作主体の相対化を図るものであるが、この要請についての反応は、現在のところ見られない。

また、ホームページを周知させるためには、Yahoo、Yahoo JAPAN、NTT、Japan Gatewayに登録している他、Netnewsのニュースグループfj.soc.environmentおよびfj.soc.miscにアピールを投稿している。

これに対しては多少の動きがあって、学芸出版社のリンク集に収録されたほか、持続可能なシステムを目指すコミュニティーの世界的なネットワークである”Eco-Village”との相互リンクが実現している。また、個人的な交流を通して、車依存を脱却する都市システムを提案する”car-Free-City”や、バイオガスなどの開発に行動する”自然エネルギー事業協同組合REXTA”などの存在を知りリンクを張ることができた。

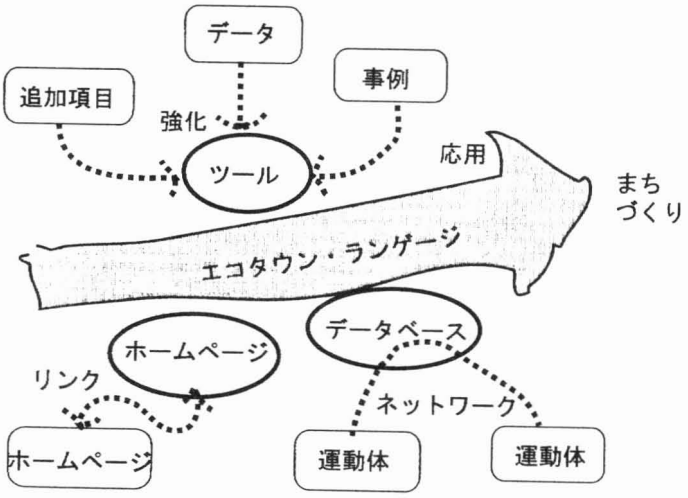

図７－４　エコタウン・ランゲージの運動

こうした動きはエコロジカルな「まち」のイメージを全国に発信するための努力であり、部分的なオールタナティヴ・スポットを構築し、やがてはオールタナティヴ・ネットワークの創出へと向かう動きの第一歩といえる。（図－4）

しかし、運動体データベースの作成は簡単には進んでいない。統一的な情報の収集が管理に通ずる側面をもつからである。運動体は統一的に管理されることを本質的に嫌うので、ひとつずつ信頼関係を結ぶことで情報を提洪してもらうという形で、埼玉県から手を着け始めている。

以上を総括して見ると、次のような問題点が残されている。

1　エコタウン・ランゲージが一般論として受け止められてしまい、そこからから抜け出られないでいること。エコタウン・ランゲージは本来、特殊性への適応を目指して作られているのだが、どのようにして適応できるのかという仕方に分かり難い点があり、先行事例のまちづくり基準などの参照の方が具体的で解りやすく取り付きやすいようである。しかし、この場合には特殊性の差異を乗り越える必要があり、

かなりの困難さが避けられないし、エコロジカルな視点を併せもつものも少ない。

2　現状では、一般にマスタープランを求めることが多く、イメージ言語を使うということが奇異に思われること。マスタープランが形式を固定してしまい、往々にして特殊性を無視してしまうということへの批判からエコタウン・ランゲージが生まれているということが理解されにくい。

3　「まち」は自分たちで造るものという認識の遠さ。まちづくりが大きな事業として行われ行政の仕事であるというのが普通の常識であり、自分の住宅の改良などというレベルには全く無関係であると考えられているのが現状である。想像力が羽ばたかないでいる。

4　インターネット自体がまだ一部にしか普及していないこと。マスコミに喧伝されているよりも遥かに一部でしかなく、特にまちづくりに関わる年輩者には縁が薄いという問題がある。